

第2回

ダニエル・カールの

消防団 コラム

有明海と火山と歴史の街「島原市」

今から21年前、雲仙・普賢岳が198年ぶりに噴火し、世の中に「火砕流」という言葉が知らされ、その時の溶岩ドームは、平成8年に「平成新山」と命名されました。

今回は、そんな大噴火を経験した島原市消防団を訪ねて、私、ダニエル・カールが消防団長さん達に色々お話を聞かせていただきました。

これから、ご紹介する島原市は、長崎県の南東部に位置する島原半島の東端に位置しており、その面積は82.77km²で市の中央部にある眉山の背後に普賢岳を控えて、東に有明海、北西

部に雲仙市、南を南島原市に接しており、人口は、48,191人（平成24年4月末現在）、年間通して平均約19度と温暖な気候は県内でも有数の農業地帯を育てています。また、1792年に、雲仙・普賢岳が噴火した時に眉山が山体崩壊を起こし、大量の土砂が島原城下を通り有明海へとなだれこみ、このため10メートル以上の津波が起り、対岸の肥後天草は、甚大な被害を受けました。俗に言われる「島原大変、肥後迷惑」です。この地にも、災害の歴史がきざまれているのですね。



ダニエル ここ島原の名物と言えれば何が一番ですか？

兼元さん 具雑煮。料理です。餅と色々な島原の乱の時代からの非常食として採った物のごった煮です。

ダニエル 郷土料理みたいな感じなんだ。お正月食べるお雑煮みたいものなのかなあ。

兼元さん そうですね。通常お正月に食べるのが、ほとんどですね。



ダニエル 島原市は、合併されて48,000人程に今はなっているんですね。合併したのは、何年前でしたっけ？

兼元さん 18年の1月1日ですね。

ダニエル 6年位前だ。私も昔せっかく色々な地名を覚えていたのに、合併してからわからなくなりました。ところで、本田団長さんに個人的なことなんですけれども、入団されてから何年目くらいですか？

本田団長 入団してから私は28年目です。でも、私の事情といいますか、入団のきっかけは普通ではないところがありまして…、私は、島原市の生まれなんですけれども、母親の実家が旧有明町なんです。私は二男で、県外に学校

と仕事に出ていたんですが、戻って来て母親の実家を継いでくれということで、実家に帰って、たまたま、道端であった人がその時の分団長さんで、「自分が辞める時に、あなたを代わりに入れたい。」ということを言われたので、「あっ、そうですか。2年後ですよ。」と言って別れたんですが、その年の7月1日ですね。いきなり入団ですよ。大体、3月の末位に母親の実家に行って、その分団長と4月位に会ったと思うんですけど。それで、家に戻ったら即刻入団で、私は、地理もまったくわからない時ですよ。あれはビックリしました。(笑)

ダニエル 強制的にですね。(笑)

本田団長 いわば、そういう感じでしたが、それから、現在に至っているところです。

ダニエル いや、珍しいとおっしゃっているのですがよくあるお話です。その地方地方で伝統しているのがありまして、この家のお子様は必ずお父さんの後って言うのがありますなあ。で、28年前に何がなんだかわからないけど入団されたんですねえ。

本田団長 そうなんです28年です。島原市消防団では、20年以上って言うのは、結構長い方なんです。平均的には15年から18年位で消防団を辞めるんですよ。

ダニエル 結構みなさん長いんですね。

本田団長 いえいえ、短いです。だいたい20歳くらいで入って36歳くらいであがるとか。卒業といいますか、次の世代に送り退団します。

ダニエル あっ、そうですか。

本田団長 平均的に在籍期間が15～6年で辞めていく人が多いです。

ダニエル そうすると、平均年齢はどのくらいなんですか？

本田団長 平均年齢は、32.3歳くらいです。

ダニエル 女性の団員さんもいらっしゃるのですか？

本田団長 女性の団員はですね、平成21年に全国女性消防団のポンプ操法大会っていうのがあって、当番がうちに回ってきたものですかから、その機会に女性消防団員10名で立ち上げて、それで全国大会に行き自慢のひとつでもあるんですが、全国で8位に入賞しました。

ダニエル や～、それは、発足して即初入賞おめでとうございます。

本田団長 ありがとうございます。

ダニエル では、消防団全体の話をお聞かせください。何団に分けられているのですか？

本田団長 分団は、全部で24分団あり、各分団20名～35名の男性の団員がおります。本部付で女性消防団員が10人所属しています。また、本部と6地区24分団の組織になっており、副団長と本部部長が、各地区1人ずつで12名います。そして、本部に私が団長、その下に総務部長という者がいて、この14名の男性本部



員と女性団員10名で総員24名が本部ということになります。

ダニエル 了解。了解。OK。なかなか大きな組織ですなあ。今から6年前に隣町と合併したと聞きましたが、消防団員の皆さんも合併になる訳なんですよ？その時のコミュニケーションとかはどうですか？大変だったでしょう？

本田団長 大変というか、やっぱり。ここ島原はですね、長崎県でも3番目に市制施行が早かったものですから、70周年を迎えられたんですね。去年、一昨年だったかな。島原半島は、あと旧村町とですね。ここだけが市で行政の仕組みがまるっきり違いますから。

ダニエル 違ったんだ。

本田団長 それで、私は、旧町の出身ですから、意見の通し方というか、言い方というか、そういう仕組みが違うものですから、順番があつてですね、その辺がややこしかったですね。

ダニエル 今は、どうですか？今はお互いにだいぶ慣れて。

本田団長 それは、もうなるべくコミュニケーションをするようにということで、同じ近辺同士ですからね。昔から親戚関係みたいな感じと言いますか、顔は知っているしさほど違和感はないですね。

ダニエル うんだか。もちろん、同じ消防団員だしね。

本田団長 親戚は、お互い島原、有明それぞれにあるし。

ダニエル 都会とちょっと違って。地方ならではの、昔からの付き合いというか、学校が

一緒だったりとか、同級生だとか。

本田団長 高校で、ほとんど一緒の学校になりますから、どこかで繋がりはありますね。

ダニエル じゃあ。割とスムーズに。

本田団長 スムーズですけど、消防団の場合は、地区の分団その小さな集落だけの伝統があるんですよ。ちょっと違うというか。

ダニエル 正直、まとめるのが一つの話題というか。

本田団長 やっぱり、街中というか発展している所と、ちょっと遅れている所の差というかですね。やっぱり郷にいえば郷に従えの言葉がいきるようなところですよ。

ダニエル 消防団長さんとしてもね、頭の悩ますところのひとつだと思いますけれども。もう一つ聞いていいですかね。消防団の活動のなかでも、28年間にわたって色々な体験をしてきたと思うんだけど、印象に残る活動とか、大変だった活動はどんなことでしたか？

本田団長 平成3年の雲仙・普賢岳噴火災害より火砕流があったその年に台風17号、19号が来て、災害の追い討ちというか、1回大きな災害にあえば、また、続いてくるといようなイメージをその時に持ちました。結構大きかったんですよ。特に、台風19号は。

ダニエル それが、火砕流と同じ年だったんですね。

本田団長 同じ年の秋です。火砕流が6月。その後で、全国で地震とかあった時に、台風がくるかもしれませんから注意してください。ぐらいは知り合いには言ってたんですよ。東北の辺りも地震後には、冷害など寒さが厳しかった

とかあったじゃないですか。今は、竜巻とかあるし。災害は重なるのかなあって印象はもっています。

ダニエル 火砕流は平成何年でしたっけ？

本田団長 平成3年です。去年が、災害から20周年でした。

ダニエル 昨日も、それを思い出そうとしてましたけど。私も番組のレポーターとして2、3回位普賢岳に見にきました。火砕流の時も来たことがありますし。あと、2、3年たってからの復興工事や砂防ダムを建設現場とか、珍しい無人のトラックを使っている取材もしました。

本田団長 彼は、その地区の現在の副団長です。一番被害の大きかった所の地区です。



ダニエル 砂防ダムとかのところの？

前田副団長 すぐ隣の地区なんですけれども。災害後入団ですもんで。

ダニエル じゃあ、家が半分埋もれている所とか近くでないですか。

前田副団長 見たことがない災害だったので土石流の流れた後に、うちの職人さんとかが見に行って、膝までぬかって火傷したとかですね。無知で、そういうことをする人もあったんですよ。

ダニエル 火砕流の200年前だったとかで覚えている人は、誰もいないし分らなかったんでしょ。火砕流が実際に来る前は どうだったんですか。兆候があったとか？

本田団長 それは、前の年ですね。

ダニエル 地震が連発してたと思うんですけども。その頃の消防団の皆さんの動きは？どんな準備とか？

本田団長 溶岩の粘質が固いんですよ。ハワイのキラウエア火山みたいにガラガラ流れてくるような溶岩ではないので、溶岩に対する恐れは何もないと。噴火した時が問題ということだったんですが、まだ、噴火のことも聞いたこ



とがないし、ただ煙だけでしたので、下から溶岩ドームがわき上がってきて、すぐに冷めて固まるというような繰り返しで、それが崩れて火砕流が来るのも、すごい熱風が来るというイメージも持ってないんですね。ただの砂嵐みたいに、さあっとほこりが上がってくるという感じでした。

ダニエル そうですね。まさかですね。そんで石が飛んでくるってイメージですか？

本田団長 いや。なんかジワジワ下からせり上がってきて煙が飛ぶとか、火山灰が飛ぶとか、火山礫っていうか飛んできたのは火砕流の後だったかなあ？

前田副団長 火砕流の後でしょう。

ダニエル 僕もカルフォルニアから来ているんだけど、火山は家から、ずーっと遠くて富士山みたいに綺麗な形の山で噴火すると上に全部いっちゃうってイメージがあり、下に流れてくるというのが全然なかった。火山の専門家にしか分からないようなあ。

兼元さん 流れるというか、下からせり上がってくるような、下から押し出されてくるような。それが、崩落ですね。崩落するときに、



中にものすごく高熱を含んでそれが崩れて、その時にガスを発し、それが、その時に風向きにより噴火した時も、火山礫が人間のこぶし位の飛んできました。

本田団長 ただ、灰はですね、砂嵐と言うかすごかったです。家の中にも入ってくるような状態でした。水無川という川があってですね。昔から水がない川で、やっぱり災害用の川だったんですよね。そこにほとんどの火砕流が流れてくような状態でした。まだ、そんなに心配しないでいいのかなあっと、最初は思っていたが、それが、だんだん大きな岩までが流れてくるようになって、さっき前田副団長が言った土石流を見に行ったら腰までつかったら、火傷するくらい熱かった。それが、皆に伝わるのが遅かったんですね。土石流があった時点で、熱いということは、火砕流がおきた時も、かなり熱いという予想をつけなければならなかった。今は、わかるんですけども、当時は、それが分らなかったんですよ。

ダニエル 全世界にも、映像が流れたんですけども。みなさん、ビックリしたと思うんですよ。火山ってこういう動きもあるんだなあ



と。本当に準備というか、対策というか、予め対策をとるということが出来なかったというか。想像もつかなかった。未曾有の災害ですよ。

森川消防主任 その時に亡くなった人は43名ですね。報道関係者、消防団関係者含めて。

ダニエル 住民が、まだ家にいたのですか？もう、避難されていたんですか？

本田団長 住民の方々は、警戒区域が決定されていたので、避難していました。ただ、報道関係者の方々が大丈夫だろうと警戒区域内に入って報道写真を撮っていたんです。

ダニエル 避難勧告は出ていて。でも、それを無視したというか。

本田団長 早い話そうなんです。北海道の有珠山の時もそうなんです。有珠山の避難勧告計画が設定されたら、すべての人間が撤収した



じゃないですか。あれは普賢岳噴火災害の教訓ですよ。この時にですね普賢岳噴火災害のときにも警戒区域を設定して、消防団も立ち入るようになっていたんですが、報道関係者がしょっちゅう出入するものですから、その見回りのために出ていたんですよ。

本田団長 住民の人も、その時は勝手に帰ったりしました。たばこ栽培が盛んな所で。

ダニエル じゃあ、その農家の方が、ちょっと様子を見にいったり。噴火しない限りは大丈夫かなと。そして、火砕流が実際に起きてしまったと言うことですね。やっぱり大自然の力のすごさを感じ取ったのではないのでしょうか。改めて犠牲になった皆様のご冥福をお祈りいたします。

ダニエル さて、最後に島原市消防団についてPRしたいことや部下の団員さんたちに何か一言ありましたら、全国ネットのこの消防基金の広報誌でPRなどしてください。

本田団長 消防団のPRは、女性消防団員を全面に出して島原市消防団をPRしていきたいと思っています。また、噴火災害当時から、全国からの善意という形でいっぱいお見舞い金を頂きました。改めて、この場をお借りして深く御礼申し上げますとともに、そのお礼も兼ねて出来るなら、全国あちこちに出掛けて行って、私たちは元気ですということをお伝えしたいと思います。

ダニエル 是非、今後の活躍を期待しますので頑張ってください。前田副団長にもお聞きします。

前田副団長 今、団長が言われたとおりになんですけれども、私は、部下の団員に伝えたいことがあります。消防団の先輩達から具体的な話しか聞いてないんですけれども、火砕流で12名の消防団員が亡くなられて、なんでそこに「命をかけてまで」ということ、「やっぱり自分の所、我が町は自分で」という精神の元で、最後まで守るためにあそこにいました。やっぱり「命は大事にしないといけない」ということ。「自分の町は自分で」という気持ちは先輩方々の意志でもあり部下の団員達にも伝えていきたいし、ずっと忘れずに後輩達にもつなげていくことが大事かなと思います。今は、なかなか言葉で直接言うこともないので良い機会なのでここで言わせていただきました。

ダニエル そうですよ。消防団員の皆さんが自分の町に住む住民を守る気持ちが「避難してください。」とか声をかけながら、尊い命を残念ながら失ってしまった方がたくさんおられる。この間、東日本の震災もやっぱりね。声かけながら、亡くなった消防団員さんも何人もおられるわけですよ。ある意味亡くなられたのは、非常に悲しいのだけれども、その心が美しいものがあってです。尊敬すべきだなあ。

本田団長 地元住民の皆さんも、災害時に土嚢を積んでもらうとか、町内会長に言っても伝わらず地元副団長に直接頼ってこられたみたいな話で、権限は町内の中でも本部員、分団長っていうのが各分団あって、最後に頼る所はここなんだ、そういう自覚をもって行動することを先輩から災害当時も言われてきたことで、責任感ということを教えていかないとなりません。

ダニエル んだ。んだ。本当にその通りですよ。日本は災害が多い国なんです。台風も来るは、地震は来るは、火砕流も津波も来るわ。なんだか、ある意味、毎年毎年ではないんだけど、ちょっと忘れかけた時に突然くる感じがあるんですよ。消防団だけでなく消防士もそうだし。警察署の皆さんもそうだし。まあ、いろんな人達がちょっとだけ心の中で準備して

なければと思いますね。これからも、島原半島のために、島原市のため頑張ってください。

本田団長 ありがとうございます。

ダニエル よろしくお願ひします。今日の取材は良い話を聞かせていただいたわ。全国の消防団の皆さんも、何時も地元を守っていただき本当にご苦労様です。



(後列左から) 副団長 前田幸栄氏、消防主任 森川博文氏、生活安全グループ長 兼元善啓氏
(前列左から) ダニエル・カール氏、団長 本田庄一郎氏